

Title	米山桂三先生追悼之記
Sub Title	
Author	十時, 巖周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.3 (1980. 3) ,p.169- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	米山桂三先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800315-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日マス・コミュニケーションあるいはコミュニケーションの研究として一人だちし得たのも、先生の御指導の賜物である。今年の六月、先生がかつてその創立委員として、また、後にはその会長として非常な努力を傾けられた、日本新聞学会の会長に私が推された際に、まず、思いに浮んだのは米山桂三先生のことであつた。

先生の衣鉢をついで一層の努力を傾けることが、残された私たちの先生への報恩の道であると思うが、それにしても先生を失つたことはかえすがえすも残念である。ただただ、米山先生の冥福をお祈りするのみである。

米山桂三先生追悼之記

十 時 嚴 周

一九七九年十一月十七日、米山桂三先生は逝去された。享年七十三歳であつた。

先生に初めておめにかかつたのは、一九五〇年四月下旬、『社会調査』という特殊講義に出席したときであつた。受講者は七、八名であつた。他に必修科目『産業社会学』を開講されて

いた。必修科目は受講者が多く大教室で講義されていた。特殊講義『社会調査』の受講者はさらに少なくなつたので、直接お話しする機会に恵まれるようになった。当時、先生は四〇代の半ば、戦前からの先生の第一研究主題『輿論研究』から、第二の研究主題『産業社会学』に移られた頃であつた。その前年度に発表された論文「産業社会学——その成立と発達——」（『法学研究』二三巻六・七号）は、私が本気で読んだ最初の学術論文であつた。

当時、私は長い療養生活から三田に復学した直後であつた。終戦直前、勤労動員のさなか突然咯血し、爾来約五年間、神戸須磨浦の結核療養所で生死の境を彷徨していた。大気安静療法しかなかつた時代である。海のみえる楠林の丘に横臥し、毎日青空を凝視し続けていた。夏は烈日の陽ざしを緑蔭に避け、真冬は凜冽の空気に肺を曝すべく、大気のもとに横臥し続けた。トーマス・マンの『魔の山』に魅せられたのもその頃である。

左肺上部鎖骨下の鶏卵大空洞は、確実に、死への静かな接近を意味していた。毎日、死のことばかり考えていた。療養雑誌『保健同人』を読み始めたのもその頃であつた。鶏卵大空洞を壊死させることこそ、起死回生の唯一の途であることを理解した。一九四七年、左肺胸廓成形手術を受けた。肋骨九本を摘出する手術であつた。術後、さらに二年半、療養所で黙想する生

た年、法学部助手に任用された。先生が五〇代にはいられた頃である。その年、先生の推薦と当時の奥井塾長の命令で、他学部四名の専任者とともにハーバード大学ビジネス・スクールに派遣された。そのとき、先生は、私に二つの研究課題を与えられた。第一は、産業社会学からみた経営管理教育の日本での在り方と、第二は、ハーバード大学での文化人類学および応用人類学の現状を研究していただくことであつた。日本での経営管理教育が萌芽期にあつた頃である。

考えてみると、先生との出会いは、私にとつて運命的なものであつた。三〇年以前、先生に初めてお会いしてから、私の人生は先生の強い磁力と磁場のもとで展開してきたように思う。先生は一言でいつて、非常に鋭い時代の観察者であつた。つねに時代を先取りしてこられた。先生が日本での産業社会学の体系を確定し、膨大な「九十九里浜調査」の英文報告書を完成された年齢に、私もいつしかたどりついてしまつた。先生は、いつまでも、私にとつてつねに先生であり続けている。

米山桂三先生を偲ぶ

川 合 隆 男

一九七九年晩秋、米山桂三先生はここ数年に及ぶ闘病と御家族の懸命な看病にもかかわらずついに御逝去なされてしまつた。二十数年にわたつて直接声咳に接し、あの元氣潑刺たる風采の先生のお姿を想い起すとき、晩年の病床での痛ましさとこゝろしてにわかにお別れする結果が来ようとは今だに信じることができない。昨年中は身近に学友・同僚の市川統洋さんが突然に逝き、恩師米山桂三先生、また有賀喜左衛門先生を喪つてしまい、わたくしなりにさまざまの思い出が去来彷彿し洵に感慨無量である。

米山先生の長年にわたる御研究や学問についてじっくり考え触れてみることの出来る日がいづの日か来るかもしれない。いま不肖の弟子、ものぐさな愚生の身なりに、たとえ断片的で私的な追憶であつても感じるままにそのいくつかを記しておきたい。この点でわたくしにとつて特に印象深いのは、(i)先生の旺盛な研究意欲・広範な研究領域・先駆的諸研究、(ii)「変動期・